

## 太宰府

1993  
10.1

■毎月2回/1・15日発行 ■編集/福岡県太宰府市総務部企画課 TEL (092)921-2121 内線513・514

太宰府の  
文化財

101

## 木造鑑真和上坐像

後屏牀座共 一軀

(市指定文化財)

像高七〇センチ 江戸時代 戒壇院蔵



先月に引き続き戒壇院の仏像です。仏像といってもこの像は鑑真和上像で、祖師像とよばれる部類に入ります。この和上像も先月の文殊菩薩・弥勒菩薩像と同様、戒壇院の江戸時代初めの復興期のものです。

鑑真和上は中国の僧で、奈良時代、日本に授戒の制度を伝えるために渡ってきて、東大寺に戒壇を開いた人です。太宰府の戒壇院もそれに伴って開かれたという歴史から、鑑真像が造られ、安置されたものと思われま

す。仏師も同じ照暁で、両菩薩像から五年後の宝永二年(二七〇五)六月に造られたようです。松材の寄木造で、白い胡粉を塗り、その上に色が付けられていました。しかし現在は色が落ちて、下地が見えているところもあります。この像も人々の浄財で造られました。鑑真和上が座る牀座の背もたれの板には「福岡萬町 松村宅兵衛」「橋口町 西嶋伊兵衛」「箕子町 青柳利兵衛」など七人の人々が名を連ねています。

ところで鑑真像は奈良の唐招提寺の像が有名で、その後制作された鑑真像の手法になっています。戒壇院のこの像も唐招提寺の像を直接あるいは間接に参考にしたと考えられています。太宰府の戒壇院のほか、東大寺戒壇院、京都法金剛院にも江戸時代制作の鑑真像がありますが、いずれもこの像より後に造られたものです。

戒壇院のこの像は近世の古例に属するものとして貴重で、前回の両菩薩像と共にこのたび市の文化財に指定されました。

# 太宰府

1993  
11.1

■毎月2回／1・15日発行 ■編集／福岡県太宰府市総務部企画課 TEL (092)921-2121 内線513・514

## 太宰府の 文化財

102

## 鬼おに 瓦がわら

### 平安時代 松倉瓦窯跡出土



鬼瓦は太宰府文化を象徴するものとして良く知られていますが、この写真の鬼瓦は、その良く知られた凛々しい風貌の鬼瓦とはだいぶ違っていますね。しかしこの鬼瓦も太宰府で出土したものです。この鬼瓦は大字坂本の松倉で発見された瓦を焼いた窯跡から見つけられました。有名な鬼瓦が奈良時代に作られたものなら、この鬼瓦はそれから約二百年くらい後の十世紀、平安時代に焼かれています。二百年もたつと鬼(瓦)も随分、丸くなりますね。

松倉瓦窯跡と呼ばれるこの窯跡からは、ほかに「佐」という文字が付けられた平瓦がたくさん出ました。そこで、この瓦窯は「佐」印の瓦を生産した所だと考えられています。そして窯が盛んに煙をあげていたのは、十世紀の前半ごろといわれています。

この鬼瓦は九州歴史資料館で十月二十六日から十一月二十八日まで開催されている特別展「日本の鬼瓦」展で見ることができます。

真提供…九州歴史資料館

# 太宰府

1993  
12.1

■毎月2回/1・15日発行 ■編集/福岡県太宰府市総務部企画課 TEL (092)921-2121 内線513・514



## 太宰府の文化財

103

### 原 遺 跡 平安時代 所在 字 原

四王寺山の東南斜面、浦の城の団地の後は原とか原山などと呼ばれています。昔、無量寺というお寺があったと伝えられる所です。

無量寺は、寺伝によると平安時代に天台宗の僧円珍の八人の弟子たちによって建てられ、室町幕府を開いた足利尊氏も一時滞在するなど、かなり大きな寺だったようです。現在、江戸時代に描かれたと考えられる絵図(平成三年十月一日号参照)が残っており、それには山の斜面にたくさんのお堂が建っている様子が書かれています。絵図と実際がどのくらい一致しているか、まだまだ分かりませんが、最近の発掘調査で絵図に描かれたお堂の跡ではないかと思われるものが見つかりました。

場所は太宰府ユースホステルの少し上で、写真のような建物の礎石と石垣などが出土しました。時期は平安時代の後期で、末には廃絶したもようです。瓦が見つからないので、その建物は瓦葺ではなく、茅か何かが葺かれ、規模も大きくはありませんが、礎石の様子などから、なかなか立派なお堂が建っていたのではないかと想像されています。

そして絵図で検討すると、周辺の地形などから「大日堂」と書かれたお堂に当たる可能性が出てきました。もっと多くの調査を経ないと確定はできませんが、言い伝えと絵図くらいでしか窺えなかった原山無量寺の姿が、少しずつ明らかになるようで、とても楽しみです。



# 太宰府

1994  
1.1

■毎月2回/1・15日発行 ■編集/福岡県太宰府市総務部企画課 TEL (092)921-2121 内線513・514



(写真撮影・石丸 洋)

## 太宰府の文化財 104

### 博多・太宰府図屏風 六曲一双

各縦一六〇・五センチ 横三四二センチ  
紙本彩色 江戸時代

筑紫野市大賀家所蔵

博多湾岸にひろがる福岡、博多のまちそして志賀島、能古島なども描かれた博多の図と、関屋から太宰府天満宮までのさいふ詣りの道筋を描いた一隻が対になった屏風があります。写真は太宰府を描いた方の屏風です。

太宰府天満宮はもちろん観世音寺、戒壇院そして五条から参道まで続く菓葺きの家並、竈門山(宝満山)などが描かれています。次にもう少し細かく見てみましょう。

関屋から天満宮詣での道へ入ってきた人々の中には供を連れた武士、芸妓の一行などもあります。

写真①は観世音寺、戒壇院辺りですが、札打の娘や天秤棒を担いだ人、一服している馬方なども見えます。そこから御笠川を渡ると五条の構口。身を潔めてまちの中に入ると、ずらりと店が並んでいます。草鞋を売る店、茶屋そして道を往き交う人も多くなります(写真②)。五条から横町そして新町と家並は続きます。横町と新町が交差する角には藩のお触を掲示する制札場もあります。

いわゆる参道にあたる大町まで来ると、両側に旅館が並び、供を連れた武士、馬や駕籠で来る人、座頭さんなど様々な旅人や荷物を運ぶ人など賑やかです。馬場は天満宮に仕える神職や僧が住む社家町で、大町との境には齋垣があり、鳥居、神輿の休所として参詣の人、物売り、子を背負った女などが描かれています。(写真③) 太宰府のまちや人々の様子が生き生きと写されたこの屏風は、江戸末期の天保年間に太宰府住の絵師斎藤秋圃によって描かれました。

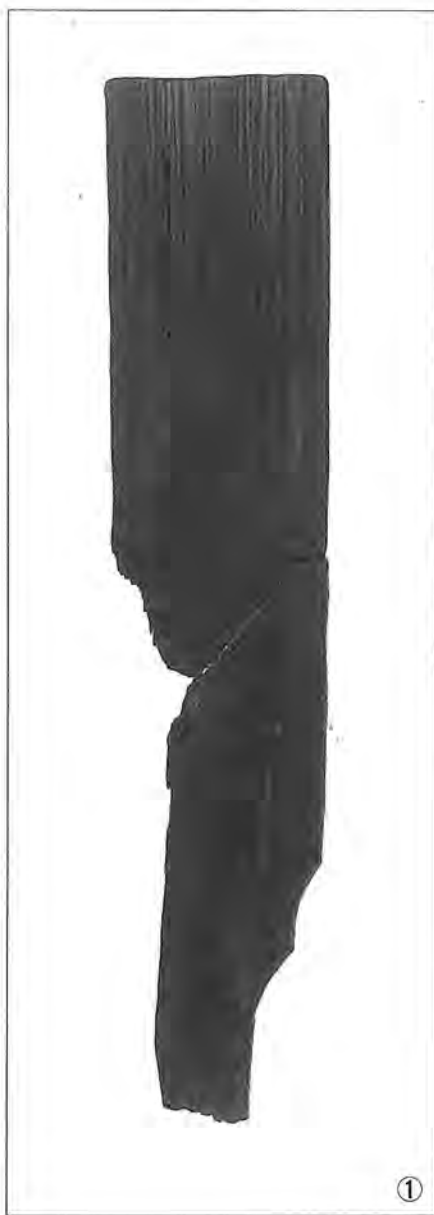


# 太宰府

1994  
2.1

■毎月2回/1・15日発行 ■編集/福岡県太宰府市総務部企画課 TEL (092)921-2121 内線513・514

## 太宰府の文化財 105 遊具 (1)



①

### 羽子板状木製品

室町時代

観世音寺後背地出土

現存長四〇・〇センチ 幅八・四センチ

このころは、お正月に羽根つきをする姿もほとんど見なくなりましたが、大宰府の遺跡からは昔の羽子板と思われる木の板が見つかっています。(写真①)

杉材で作られ、柄は折れているので長さは不明です。

観世音寺の後ろに広がる子院推定地の一つ、西福寺跡と考えられる遺跡から出土しました。



②

### 独楽形木製品

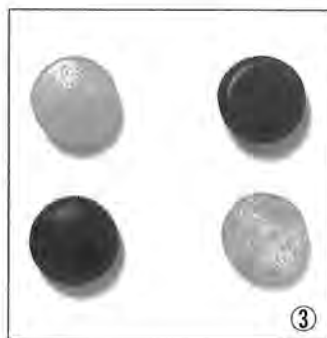
鎌倉〜室町時代

観世音寺前面域

残存高一・六センチ 径三・二センチ

独楽まわしもあまり見なくなりましたが、独楽は奈良時代に中国から伝来し、平安時代の末には、子供のあそびとして広く行われるようになっていました。

写真②の独楽は細い竹の先にコマを革紐で繋いで、それを回して遊ぶベীগマだったとも考えられます。残念ながらこの独楽は先端部が欠けていますが、別の独楽で



③

### 碁石

鎌倉時代

大宰府学校院跡

径約一センチ

碁は中国から伝えられた遊びで、奈良時代にはすでに僧や官人の間で囲碁が行われていたようです。太宰府でも学校院跡と南バイパスの調査で計数個、見つかっています。(写真③)。

どんな人たちが碁を打って楽しんでいたのでしょう。

(写真提供・九州歴史資料館)

は先端に芯棒を打ち込む孔があけられているものもあります。観世音寺と戒壇院の参道に挟まれた地区の調査によって出土した溝の跡から見つかりました。

# 太宰府

1994  
3.1

■毎月2回/1・15日発行 ■編集/福岡県太宰府市総務部企画課 TEL (092)921-2121 内線513・514

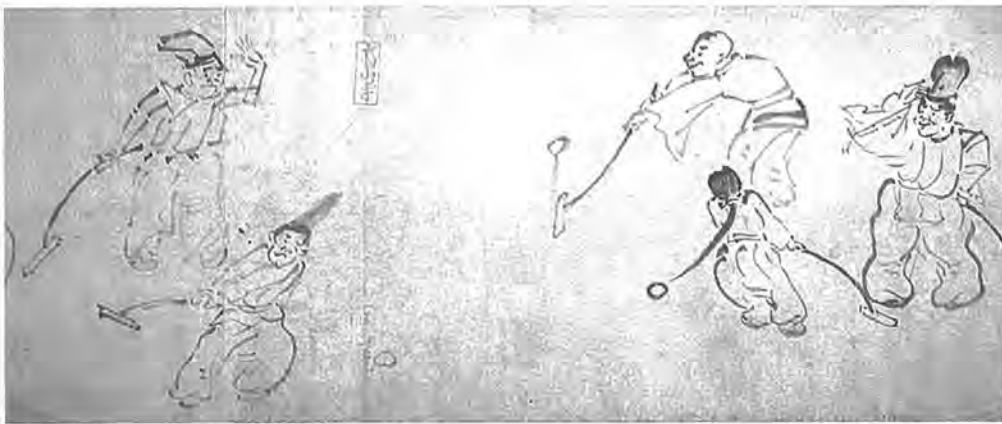
## 太宰府の文化財

106

## 遊具(2)

毬打ぎうちょう

鎌倉時代 西鉄五条駅南側出土  
 毬杖まりづえ 先端部長約二四センチ  
 毬まり 長三〜五センチ



毬打に興ずる人々 『鳥獣人物戯画』より

毬打とは現在のホッケーのような遊びで、木製の玉(毬)を槌形の杖(毬杖)で打ち合せて遊びました。本来は馬に乗って行う競技で、打毬と呼ばれ、今でもモンゴルの草原などでは遊牧民の祭りの時などに行われている様子をテレビで見ることがあります。イギリスのポロもこれが起源といわれています。

日本では馬に乗らずに、徒歩で打ち合う遊びに変化し、平安時代の終わりごろから鎌倉時代にかけては盛んに行われていたようです。「鳥獣人物戯画」や「年中行事絵巻」などには子供から坊さん、武士に至るまで、遊び興じている姿が描かれています。

また「徒然草」には、「さぎちょうは正月に打ったさぎちょうを内裏の真言院から神泉苑へ出して焼く行事であった」と記されています。現在、左義長はどんど焼きとも呼ばれ、お正月のしめ飾りや書き初めなどを焼く行事となっていますが、その起源の一つがこの遊びに関わるものだったのです。

さて、太宰府でも毬打が盛んだったころがあったのでしょうか。現在までに十本近くの毬杖と数十個の毬が発掘調査によって見つかっています。

「カーン、カーン、ワァー」あつ、どこかで毬打をしていると思ったら、現代の毬打、ゲートボールでした。

(写真提供…九州歴史資料館)

## 太宰府

1994  
4.1

■毎月2回／1・15日発行 ■編集／福岡県太宰府市総務部企画課 TEL (092)921-2121 内線513・514



## 太宰府の文化財 ⑩7

## 戒壇院本堂

1棟 江戸時代

平成5年の2月から始まった修理も無事終了し、戒壇院の本堂がまた昔の姿を取り戻しました。

戒壇院は奈良時代の天平宝字5年(761)に観世音寺に置かれたお坊さんや尼さんの授戒道場で、日本に3カ所しかなかったため、天下三戒壇と呼ばれた由緒あるお寺です。

その戒壇院も長い年月の間、荒廃が進み、戦国の戦乱で決定的な打撃を受けたようです。そして江戸時代初期の寛文9年(1669)黒田家の家臣鎌田昌勝によって堂が建立され、戒壇院の再建が始まります。

その後、堂は延宝8年(1680)、博多の商人天王寺屋浦了夢によって改築されます。そして以後も何度か修理され、今日に至りました。

建物の構造は重層入母屋造、本瓦葺、方5間で、正面に1間の向拝が付いています。重層というのは屋根が二重になっていて、1階(下層)と2階(上層)は別々の柱を立てる作りです。屋根は下の方が四方へ、廂を葺き下ろす入母屋造。瓦は、平瓦と丸瓦を交互に葺いた本瓦葺。一般の私たちの家の屋根は平瓦と丸瓦とを合せて1枚にしたような棧瓦という瓦で葺かれています。二つの屋根の葺き方の違いを見てみてください。堂の本体は柱が6本、つまり柱の間が五つある5間の正方形。堂の中には1間四方の中心部分(身舎)があります。そしてお堂の前面には1間の軒(向拝)が出て、お参りの人を暖かく迎えてくれます。

身舎部分には切石を積んだ低い壇があります。大きさは5m四方です。これは戒壇の名残りではないかとも言われますが、はっきりしたことはわかりません。

多くの人々の心をいただいた平成の大修理、春の1日、修復なった戒壇院を訪ねてみては如何でしょう。



# 太宰府

1994  
5.1

■毎月2回/1・15日発行 ■編集/福岡県太宰府市総務部企画課 TEL (092)921-2121 内線513・514

## 太宰府の文化財

108

### たてあな 竪穴住居跡

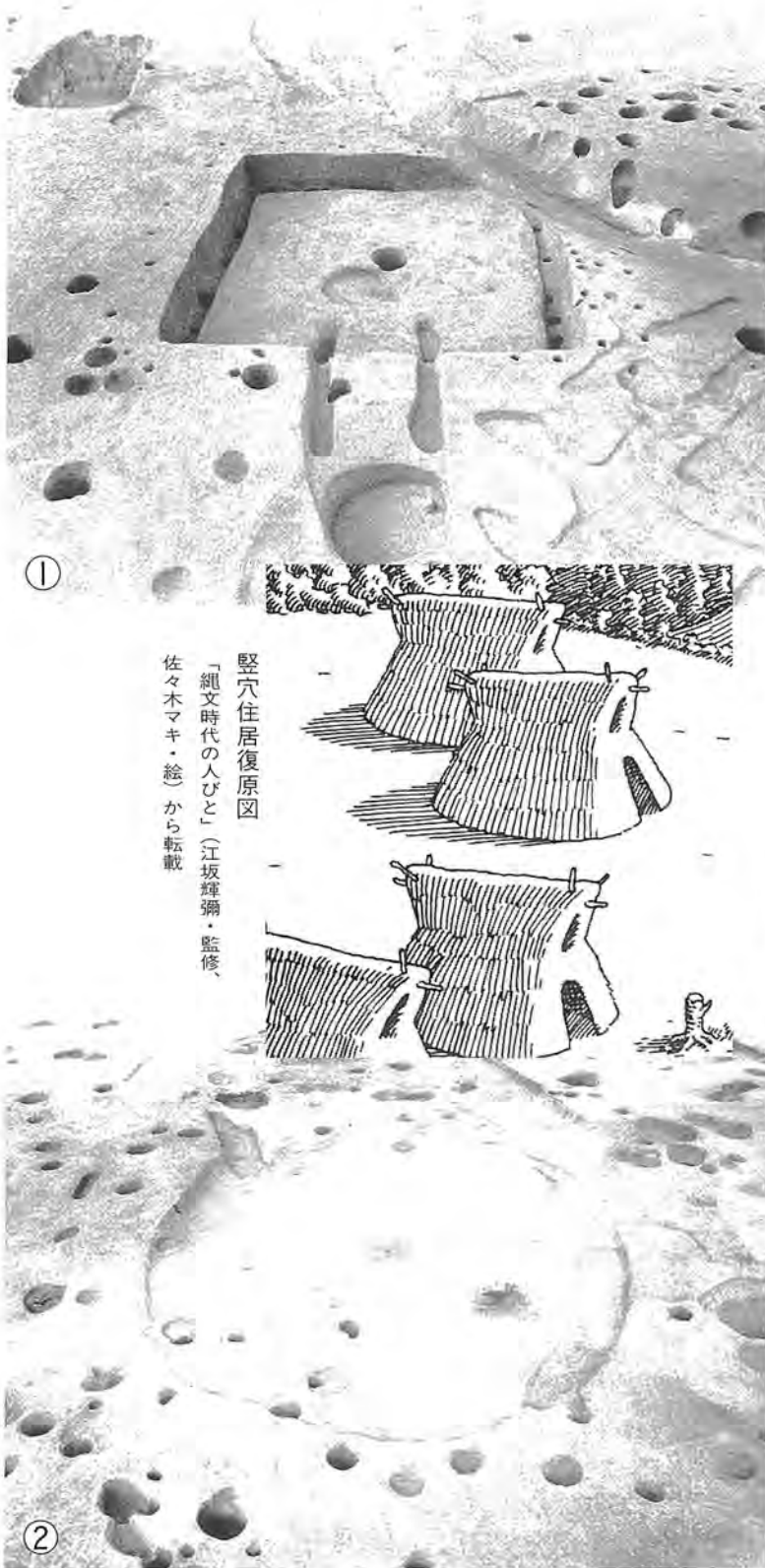
### 弥生時代

木造の家、コンクリートの家、現代の私たちは様々な形、いろいろな材質の家に住んでいます。昔の人々の住居はどのようなものだったのでしょうか。左の写真は2000年くらい前の弥生時代の人たちの住まい

の跡です。竪穴住居と呼ばれるこれらの家は、地面を50センチくらい掘り、底を踏み固めて床をつくり、柱を立てて屋根を地面まで葺き下ろした構造です。そして家の中には炉を切り、周囲に

は溝を掘ったものもあります。竪穴住居は1万年前から始まる縄文時代から弥生時代、古墳時代と日本人の住まいの中心でした。その後も地域によっては、奈良時代、平安時代もこの竪穴住居に住んでいました。写真①は向佐野の前田遺跡で見つかった弥生時代前期(約2200年前)の竪穴住居跡、写真②はそれからの200年くらい後の弥生時代中期の竪穴住居跡で、国分の松本遺跡でつい最近発掘されました。二つの写真でもわかるように、床の平面形態は時期によって変化しています。

さて、竪穴住居の住み心地はどうだったでしょう。東京郊外のある市で聞いた話が参考になるかと思えます。その辺りでは40〜50年前くらいまで、竪穴の家屋があり、仕事場に使われていたということです。そこは夏はヒンヤリ涼しく、冬は暖かく、なかなか快適だったそうです。きっと弥生の人々も天然の冷房や暖房で心地良く暮らしていたのではないのでしょうか。ところで、写真①の住居の広さは現在の畳4畳分の広さだということです。



竪穴住居復原図  
「縄文時代の人びと」(江坂輝彌・監修、佐々木マキ・絵)から転載



# 太宰府

1994  
6.1

■毎月2回/1・15日発行 ■編集/福岡県太宰府市総務部企画課 TEL (092)921-2121 内線513・514



上空から国分尼寺跡推定域(写真中央部)を望む(平成元年撮影)

## 太宰府の文化財 ⑩9

### 筑前国分尼寺跡

奈良時代～平安時代 国分二丁目所在

国分寺、国分尼寺というのは奈良時代、全国各地に国(その当時の行政区画、現在の県のようなもの)ごとに建てられた公のお寺のことです。「国」は各国をさし、「分」は某のためという意味です。

国分寺には20人のお坊さんを、尼寺には10人の尼さんを置くように決められ、釈迦牟尼を祀り、七重の塔を建て、国家の安泰を祈らせました。

太宰府市域は当時の筑前国に属し、筑前国の国分寺、国分尼寺が造られた所はちょうど市域内に入っています。そこは現在、「国分」と呼ばれる地域ですが、つまり国分寺が建っていた所なので、その名が付いたわけです。筑前国分寺の跡は今もその一面に国分寺というお寺が建っていますが、尼寺の方は言い伝えの場所があるだけで、尼寺を偲ばせるものは何もありません。

ただ近年、尼寺の推定域も開発が進み、それに伴う発掘調査によって、少しずつ尼寺と考えられる跡が見つかっています。まだ金堂や講堂などの主要な建物の跡は見つかっていませんが、南門ではないかと思われる建物跡、そしてそれに続く参道らしき道の跡などが出土しました。

これらのことから尼寺の中心部分はい伝えられていた場所よりも少し西側になりそうだということが、またお寺としては奈良時代の終わりごろから約100年という短い間しか存在しなかったらしいということが分かりました。

歴史のお堂奥深くに、ひっそり隠れた尼さんを表に連れ出すまでには、もう少し時間がかかりそうです。

# 太宰府

1994  
7.1

■毎月2回/1・15日発行 ■編集/福岡県太宰府市総務部企画課 TEL (092)921-2121 内線513・514

## 太宰府の文化財

(110)

### 太宰府横嶽山諸伽藍図 一紙

江戸時代 福岡市博物館蔵



(写真提供…福岡市博物館)

横嶽山というのは崇福寺の山号です。崇福寺は現在、博多の千代町にあるお寺ですが、始まりは太宰府横嶽でした。崇福寺は鎌倉時代に湛慧が創建し、大応国師南浦紹明が開山となった臨濟禅のお寺です。

しかし、戦国時代の末、天正14年(1586)の岩屋城の戦いによる兵火で、ほとんどの建物が焼けてしまい、江戸時代には現在の地博多の千代に移して再興されたので、太宰府の横嶽崇福寺は田や畑の下に埋もれてしまいました。

上の図は、その崇福寺の有りし日の姿、つまり焼ける前の境内、伽藍を描いたと言われるもので、これによると、法堂や仏殿などお寺の中心的建物をはじめ、周りにたくさん塔頭が並び大きな寺であったことが想像されます。

現在地に図を当てはめると「開山塔山」は筑紫台高校の裏山にあたり、「長松嶺」というのは昭和40年代初めに観世団地が造成されるまであった丘陵です。その間の谷間が寺域です。長松嶺が削られたので分かりにくくなっていますが、長松嶺跡が太宰府と観世音寺の旧大字境になっていました。団地内には法堂跡と毘盧庵跡の碑が立つ場所があります。また塔頭の「勝禅院」は現在、瑞雲寺という崇福寺の末寺が建てられています。「瑞雲庵」辺りには近年崇福寺別院が建てられました。

この図自体は江戸時代に「筑前国統風土記拾遺」を著した青柳種信が集めた資料の中にあつたもので、いつ書かれたものか不明ですが、この図の元となったと思われる図が崇福寺に伝わる『横嶽志』の中にあり、それには元和4年(1617)の図を写したとあります。そのため焼ける前の姿をどれだけ正確に描いているかわかりませんが、何方所かの発掘調査の結果ではお堂らしき建物跡などが見つかり強い想像図ばかりとは言えないようです。